

小学校社会科における多面的・多角的なものの見方や考え方の育成（第二年次）

－震災を経験した地域素材を活用する単元構成の工夫を通して－

長期研究員 平野 俊一

《研究の要旨》

社会科において、子どもたちに、社会的事象を多面的・多角的に見たり考えたりする力を育むことが求められている。第一年次では、社会的事象を多面的・多角的に見たり考えたりすることの必要性を見出した。第二年次では、震災を経験した地域素材を活用して単元を構成するとともに、自己の学びを振り返らせ、その変容に気付かせることにより、子どもたちに、多面的・多角的なものの見方や考え方を育むことができると考え、実践研究を行った。

I 研究の趣旨

小学校社会科では、様々な社会的事象と出会い、そこに関わる「人・もの・こと」について学習することから新しい発見をしたり、自分と「人・もの・こと」のつながりを見付けたりしながら、社会的事象のもつ意味を考えていくことが大切であると考え。その学びの質を高めるためには、地域の実態に応じて、魅力ある「人」の姿、その人が関わる「もの」、そこから見えてくる「こと」を活用し、単元構成を工夫することが大切である。その際、社会的事象について、様々な角度から見たり考えたりすることにより、社会的事象に対してもっている自分の見方や考え方を、多面的・多角的な見方や考え方に広げていくことが大切であると考え。社会科の入門期である小学校中学年から、この見方や考え方を段階的に育んでいくことにより、高学年、さらには中学校における多面的・多角的な学びにつながっていくと考える。

小学校中学年の社会科では、自分たちの住んでいる地域、市町村、県を対象に学習する。そこで、震災後、地域で復興に向けて工夫や努力をしている「人」の姿を中心に教材化することにより、子どもたちに、目の前の社会的事象をより身近なものとしてとらえさせる単元構成を試みた。

第一年次では、子どもたちに社会的事象を多面的・多角的にとらえさせるために、特に、地域素材を教材化し、単元構成をどう工夫していくかに重点を置いた。その結果、「農家の仕事」「店ではたらく人」の学習を通して、子どもたちに、生産－販売－消費の関係を「人・もの・こと」のつながりからとらえさせることができた。さらに、原発事故の影響による風評被害など様々な課題があったことや、それを乗り越えようと工夫、努力する「人」の姿について考える時間を単元の中に位置付けた。震災という視点から「農家の仕事」「店ではたらく人」を多面的・多角的にとらえさせることにより、子どもたちは、生産者－販売者－消費者の共通の思いである福島県なら

では「安心・安全」の意味について考えることができた。また、三者のつながりは「信頼」の上に成り立っていることに気付く姿も見られた。しかし、子どもたちのものの見方や考え方がまだまだ狭量的であったり、子どもたちの学びの変容を見取るための方法を有効に活用できていなかったりと、課題も見られた。

そこで、第二年次では、「イメージマップ」や「社会科物語」を活用して、自己の変容に気付くことができる力を育みたいと考えた。その際、子どもたちの多面的・多角的なものの見方や考え方の変容を丁寧に見取っていくことにより、学びの変容をとらえることをめざした。

II 研究の概要

1 研究仮説

社会科の指導において、以下のような視点に基づいて単元を構成すれば、社会的事象を自分のこととしてとらえ、生活と関わらせながら、多面的・多角的に考え、判断できる子どもを育むことができるであろう。

【視点1】 震災を経験した「人・もの・こと」の活用を明確にする関係図の作成

【視点2】 社会的事象を多面的・多角的に見たり考えたりさせるための単元構成の工夫

【視点3】 自己の学びの変容に気付かせる工夫

2 研究の内容と実際

(1) 授業実践における手だて

① 【視点1】に基づく手だて

地域における身近な事象を取り上げ、震災以降様々な課題に取り組んでいる「人」、その人が関わる「もの」、そこから見えてくる「こと」を関係図にまとめ、そのつながりを明確にした。

② 【視点2】に基づく手だて

子どもたちに社会的事象を多面的・多角的にとらえさせる単元構想図を作成し、その社会的事象のもつ様々な面（多面）、そこに関わる様々な立場や視点（多角）を

明確にした。それを基に、1時間ごとに、子どもたちにとらえさせたい多面・多角を位置付け、単元全体を通して社会的事象を多面的・多角的に見たり考えたりすることができるよう、単元を構成した。

③ 【視点3】に基づく手立て

自分の学びを振り返る活動として、「社会科日記」「イメージマップ」「社会科物語」を子どもたちに書かせた。「社会科日記」には、毎時間の終わりに感想や疑問、調べてみたいことなどを書かせ、学びを次時につなげた。「イメージマップ」には、教師が提示した中心的キーワードからつながる自分の考えを、線で結びながら書かせた。そして、単元のはじめと終わりに書いたものを見比べることで自己の変容に気付かせた。「社会科物語」には、「イメージマップ」で可視化した思考のつながりを基に、単元を通して学んだことや感じたことを書かせた。

(2) 授業実践の実際と考察

研究対象	小学校第4学年(21名)
実践 I	「災害からくらしを守る」(6月 10時間)
実践 II	「水はどこから」(9月 13時間)

① 【視点1】に関して(実践 I 「災害からくらしを守る」)

ア 単元設定について

学習指導要領では、「災害については、火災、風水害、地震などの中から選択して取り上げ……」とあり、それを受けて使用教科書では、「火事からくらしを守る」「地震からくらしを守る」の選択学習になっている。しかし、震災を経験した地域素材を基に、災害について子どもたちに考えさせるには、火災と地震の両方の指導内容を押さえることが大切であると考え、「災害からくらしを守る」として単元を位置付け、実践を行った。

イ 「人・もの・こと」の関係図

まず、学習に入る前に、単元において子どもたちにとらえさせたい「人・もの・こと」の関係をまとめた(図1)。

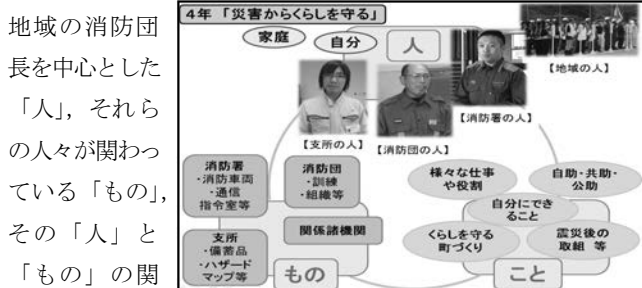


図1 「人・もの・こと」の関係図

くる「こと」を図1のようにまとめ、つながりをおさえて単元の指導に当たった。

② 【視点2】に関して(実践 I 「災害からくらしを守る」)

ア 多面的・多角的にとらえさせる単元構成

まず、図1を基に子どもたちに学ばせたい内容(多面)、気付かせたい立場の考え(多角)を明確にするため、教師の多面的・多角的

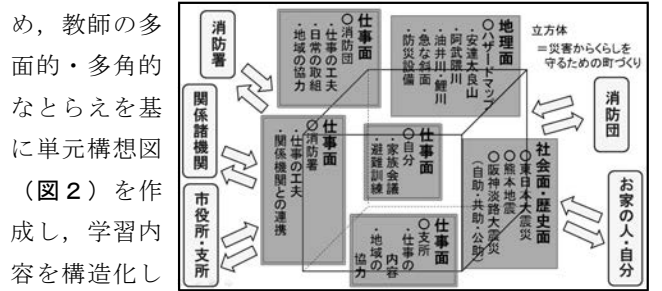


図2 単元構想図

なとらえを基に単元構想図(図2)を作成し、学習内容を構造化した。次に、単元構想図を基に、1時間ごとの子どもたちにとらえさせたい多面や多角を明確にし、位置付けることにより、学習のねらいを意識しながら、単元全体を通して指導を進めることができるように単元を構成した(図3)。

(1) 災害について	⇒ (社会面・歴史面・地理面)
(2) 消防団と消防署の比較	⇒ (仕事面・消防団・消防署)
(3) 消防署の仕事(消防署見学)	⇒ (仕事面・消防署・関係諸機関)
(4) 消防団の仕事	⇒ (仕事面・社会面・歴史面・消防団・関係諸機関)
(5) 市(支所)の取り組み	⇒ (仕事面・地理面・支所・関係諸機関)
(6) 自分のできること	⇒ (仕事面・地理面・自分)
(7) 板書での振り返り	⇒ (仕事面・社会面・歴史面・消防団・消防署・支所・関係諸機関・自分)

図3 単元構成

イ 授業の実際

単元全体を通して、震災を経験した地域の「人」の努力する姿や思いにふれさせることにより、災害からくらしを守るために、地域ではどのようなことが行われているのか、自分との関わりで、より身近に考えさせることができるようにした。単元のまとめとして、それぞれの立場での考えや取組、そして、震災を経験したからこそ自分たちの町づくりについて、多面的・多角的に見たり考えたりしてきたことを板書でまとめ、学習を振り返った(図4)。



図4 板書による振り返り

ウ 子どもの学びの姿

子どもたちは、地域を守ってくれている消防団の人たちがどんな仕事をどんな思いで行っているかを知るとともに、様々な人たちがそれぞれの立場で仕事を行っていることを理解することにより、自分たちの町がみんなの手で守られていることに気付くことができた。また、自

助—共助—公助という考えがあることを初めて学んだ。そのつながりの中で、自分にできることを考え、行動することの大切さに気付くことにより、地域の一員として、社会参画の意識を高めることにもつながった。

③【視点3】に関して(実践I「災害からくらしを守る」) ア「社会科日記」

毎時間の終わりに「社会科日記」を書かせた。子どもたちは、「消防団員が少なくなっていることが分かった。なぜそんなに減っているのか早く知りたくなった」などと書いており、教師が子どもの学びを確認し、次時につなげるための疑問等を生かす材料となった。

イ「イメージマップ」

単元のはじめと終わりに「イメージマップ」を書く時間を設けた。単元のはじめは、中心的キーワードに対して自分の生活経験や既習内容などを基に関連する言葉を、単元の終わりには、学習したことの振り返りとして言葉同士のつながりを意識して書いた(図5)。単元の終わりに書いたものは、単に言葉の数が増えただけでなく、「人・もの・こと」

のつながりを意識して書いている様子が見られた。

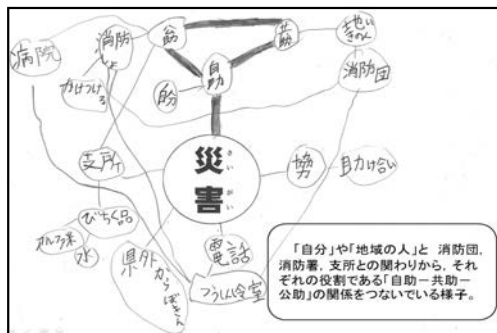


図5 A児が書いた「イメージマップ」

ウ「社会科物語」

単元の学習を振り返る活動として、「イメージマップ」で可視化した思考のつながりを基に、「社会科物語」にまとめを書く活動を行った。子どもたちは、「今まで消防の人は火を消すだけだと思っていたけど、消防署と支所の人たちとがつながり合って、火事だけでなくいろいろな災害に備えていることが分かった」「自分の命は自分で守らないといけないと思った。日頃から家の人と避難の仕方などについて話し合うことが大切だと思った」などと書いており、「イメージマップ」を基に学習を振り返らせることにより、「イメージマップ」の言葉と言葉の間にある思いを表現させることができた。

Ⅲ 研究のまとめ

1 研究の成果

(1) 子どもの気付きの変容

子どもたちは、目の前の社会的事象を多面的・多角的に見たり考えたりしてきたことで、そこに関わる「人・

もの・こと」のつながりについて考えるようになった。実践II「水はどこから」の学習では、子どもたちが「イメージマップ」に書いた言葉を「人」「もの」「こと」の観点で分類・分析した。その結果、学習を通して、実際には見えにくい「こと」への気付きが増えたことが明らかになった(図6)。これは、子どもたちが、「人」の姿やその人が関わる「もの」の存在に気付き、そこから見えてくる「こと」にまで目を向けることができ

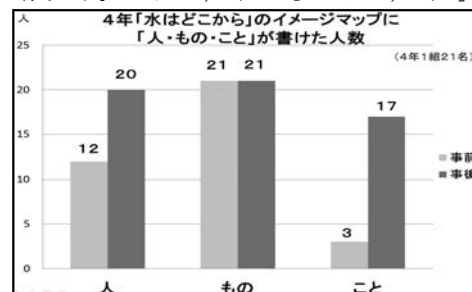


図6「こと」への気付きの変容

た結果だと考える。また、地域の「震災の経験」を学びの中に取り入れることにより、子どもたちは震災を経験した「人」の思いや努力など、目には見えないことにまで気付くことができ、自分たちの周りで何が起きているのか、自分との関わりで考えることにもつながった。

(2) 多面的・多角的なものの見方や考え方の評価

多面的・多角的なものの見方や考え方を評価する際、子どもによって表現の仕方に得意不得意がある。子どもの学びの様子を把握するためにも、「イメージマップ」や「社会科物語」「社会科新聞」等を総合して評価していく必要性和有効性を感じた。

2 今後の課題

(1) 系統的な指導に向けて

社会的事象を多面的・多角的に見たり考えたりする経験の積み重ねが、子どもの自ら追究しようとする態度、社会認識の質的高まりにつながると考えた。特に、中学年は、多面的・多角的な見方や考え方に気付かせ学ばせる時期、高学年は中学年で経験してきた見方や考え方を生かして、自ら気付いていく時期、中学校では多面的・多角的に考察する時期といった系統性を明確にした指導計画が必要であると考えた。

(2) 福島県におけるこれからの社会科

今後、震災を経験していない子どもたちが小学校に入学し、社会科を学び、大人になっていくことを考えたとき、震災からの復興を担う子どもたちだからこそ、福島の実状をしっかりと理解させていく必要がある。多面的・多角的な見方や考え方の中に「震災」という視点を加えることにより、そこに関わる「人・もの・こと」の姿から福島県ならではの学びが展開できると考える。震災を風化させないためにも社会科にできることを取り上げ、震災の教訓を将来につなげていかなければならない。